

# 法華コモンズ仏教学林

令和元(2019)年度 後期 10月開講

## 開設講座一覧と受講の手引き

### 《 開設講座 》

○ 連続講座「法華仏教講座」 全6回

- |                           |             |
|---------------------------|-------------|
| 第1回 「遠壽院荒行堂鬼子母尊像 孝明天皇親拝」考 | 講師：戸田 日晨 …3 |
| 第2回 慶林坊日隆の一仏二名論について       | 講師：平島 盛龍 …3 |
| 第3回 興門教学の究明序説             | 講師：菅原 関道 …4 |
| 第4回 日蓮の専修念仏批判             | 講師：前川 健一 …4 |
| 第5回 撰折論再考—近現代における論議を通して—  | 講師：澁澤 光紀 …5 |
| 第6回 中世の日蓮教団と富士信仰          | 講師：西岡 芳文 …5 |

○ 連続講座「これからの天皇制」 全6回

- |                          |             |
|--------------------------|-------------|
| 第1回 天皇制の「これから」をめぐって      | 講師：菅 孝行 …6  |
| 第2回 「平成流」とは何だったのか        | 講師：原 武史 …6  |
| 第3回 出雲神話論 祀らざる神の行方       | 講師：磯前 順一 …7 |
| 第4回 国家神道と神聖天皇制崇敬         | 講師：島蘭 進 …7  |
| 第5回 天皇制の将来               | 講師：大澤 真幸 …8 |
| 第6回 「象徴天皇」と「人間天皇」の矛盾について | 講師：片山 杜秀 …8 |

○ 「歴史から考える日本仏教④ 鎌倉仏教史の名著を読む」 講師：菊地 大樹 …9

○ 『法華経』『法華文句』講義 講師：菅野 博史 …10

法華コモンズ仏教学林事務局

# 「再歴史化」の知的な拠点を創りましょう！

理事長 西山茂

戦前期に生きた田中智学は、日蓮仏教を近代日本に「再歴史化」（蘇生）するために、「祖道復古」と「国体開顕」および「宗門革命」（宗門の維新）の旗を掲げて日蓮主義の運動を主導し、複数の教学講習会を開いて、以後の日蓮仏教諸派の僧俗に多くの影響を与えました。

今回、私たちが11年間も続いた本化ネットワーク研究会を閉じて法華コモンズ仏教学林（門流や会派を超えた法華仏教の学び舎）を起ち上げたのも、法華仏教（日蓮仏教）を現代日本に「再歴史化」するためにほかなりません。「再歴史化」の意味を深く考えるとすれば、それは普遍的な宗教真理は特殊な歴史状況のなかに繰り返し「再歴史化」されなければ人々への説得力を失ってしまう、ということでしょう。

現代社会は哲学の時代と違ってより複雑化しているだけでなく、教学や遺文の研究レベルも上がり、それだけ私たちが学ばなければならないことが多くなっています。こうしたことは、門流や会派が単独で法器養成等に取り組むことを非常に難しくしているといえます。そして、このような事態も、法華コモンズ仏教学林の誕生を促す要因となっているでしょう。幸い、法華コモンズ仏教学林には、多彩で優れた講師陣が揃っています。

皆さま、この際、どうか法華コモンズ仏教学林の受講生となり、門流や会派の中垣を超えて法華仏教（日蓮仏教）の共通の智を学び、ともに仏国土づくりの聖業に邁進しようではありませんか。

## 皆様のご参加をお待ちしております！

学林長 布施 義高

日蓮仏教の「再歴史化」を理念として、斯界に新たな地平を切り開いた、東洋大学名誉教授・西山茂先生主宰の本化ネットワーク研究会。また、日蓮聖人の実像や、壮大なスケールの思想の全体像を浮き彫りにすべく、日蓮門下が一丸となって編集され、平成27年全五巻の刊行完結をみた『シリーズ日蓮』（春秋社）。こうした画期的な成果を受け継ぎ、平成28年4月、西山茂先生を理事長、シリーズ日蓮刊行会会長・佐古弘文先生（同年11月御遷化）を副理事長に仰ぎ、法華コモンズ仏教学林が始動いたしました。

これから本格的に法華経や日蓮聖人を学びたい方の登竜門として、また、各教団が課題とする人材育成、次日の日蓮門下全体の隆盛へ向けての基礎作りの場として、さらには、より高みを目指す研究者の研鑽の場として、多様なニーズを満たせるよう、スタッフ一同、鋭意努力して参ります。

法華コモンズの主役は、これから参加される皆様お一人おひとりです。仏教界全体に、時代を先導し、光明を灯す力が求められている昨今、日蓮仏教（法華仏教）の立場から、世の期待に大いに応えていこうではありませんか。

### 法華コモンズ仏教学林 スタッフ紹介

#### 【運営スタッフ】

- 理事長 西山 茂
- 学林長 布施義高
- 事務担当 澁澤光紀  
竹内敬雅
- 財務担当 竹内敬雅
- 総務担当 西條義昌  
谷口 智  
波田地克利

#### 【教学委員】

- 上杉清文
- 花野充道
- 菅野博史

#### 【講座担当】

- 講座（法華仏教）武川清明 山名隆年  
佐古弘純
- 講座（天皇制）武川清明 西山明仁  
作田光照
- 講座（菊地先生）宮崎伸治 西山明仁
- 講座（菅野先生）稲田隆広 作田光照

- ブログ担当 林 明彦 / ○ツイッター担当 武川清明

—法華コモンズ仏教学林 2019年度 後期講座 全6回—

# 法華仏教講座

会 場：新宿常円寺 祖師堂地階ホール 新宿区西新宿 7-12-5 寺務所 ☎ 03(3371)1797

受講料：1期分 12,000円（半年間6回） ※1回のみ聴講は 3,000円です

日 時：原則 毎月第3土曜日 午後4時～6時（2019年10月～2020年3月）

※各回とも、講義終了後に講師を囲んでの懇親会があります（会費有り）

## 第1回 「遠壽院荒行堂鬼子母尊像 孝明天皇親拝」考—幕末期京都御所禁裏 出開帳とその歴史的意義— 講師：戸田 日晨 先生

【日 時】2019年10月5日（土）午後4時～6時

【講義概要】江戸幕末期、開国を迫る外国勢力の威圧に我が国が晒されていた当時、この国難に対処するため天皇家と将軍家が一致協力して行動する態勢が整えられつつあった。いわゆる「公武合体」運動である。その様な流れの中、重要な事案である孝明天皇の妹の和宮内親王の将軍家降嫁が画策され、その計画の基底の実働勢力として動いていたのが、法華信仰を中心とした当時の江戸城大奥の一団であり、また現地での取り持ち役として活躍したのが、宗門唯一の門跡寺院である「村雲御所瑞龍寺」の尼公であった。この一連の動向の象徴として実現した結果が「鬼子母尊神像天拝」である。さて、この幕末動乱期の歴史的実情が、その後の維新时期も含めてどの様な意味を持ったのかを考えてみたい。

【講師略歴】戸田日晨（とだにっしん）：1953年東京生まれ。練馬区大泉の西中山妙福寺にて青春期を過ごす。大学卒業後、遠壽院大荒行堂五行成満。その後、今日に至るまで35年間を修法傳師として毎冬寒百日間は加行僧の行法指導に専念している。正中山遠壽院住職、遠壽院荒行堂傳師。遠壽院総合修法研究所所長。

## 第2回 慶林坊日隆の一仏二名論について 講師：平島 盛龍 先生

【日 時】2019年11月16日（土）午後4時～6時

【講義概要】室町期勝劣派の学匠として知られる慶林坊日隆（1385—1464・以下隆師）の著述に一貫してみられる考え方に一仏二名義があります。所謂一仏二名義とは報身本仏釈尊と本化地涌菩薩との関係において言われるもので、両者は教相上は師弟の関係にありながら、その根本（本来の姿）において地涌は本仏の本因妙なる故に一体（一仏）である。而して因果一体のこの仏が、脱益の化導には本果釈尊の姿を現じ、下種の化導には本因地涌の姿を現すと考えることをいいます。非常にテクニカルな内容で今日の日蓮教学においてはあまり馴染みのない法義のようにも思われますが実は、『観心本尊抄』をはじめとする日蓮遺文にしっかりとした論拠を持つ考え方なのです。思想史的にみれば、こうした一仏二名義の淵源は南岳慧思（515—577）の『四十二字門』（今亡）にあり、その後日本の上古ないし中古天台教学の中で発展し、やがて日蓮門下の諸師がこ

の義を用いて遺文の解釈を試みるようになったことが確認されます。そこでこの講座では、まず思想的観点から一仏二名の原意と展開を概観し、続いて隆師の一仏二名義の本質に迫ってみたいと思います。

**【講師略歴】** 平島盛龍（ひらしまじょうりょう）：1959年徳島県生まれ。立正大学博士課程単位取得退学。平成26・28年度立正大学仏教学部非常勤講師。現在、興隆学林専門学校教授、法華宗教学研究所所員、法華宗（本門流）妙典寺住職

### 第3回 日興門流教学の究明序説

講師：菅原 関道 先生

【日時】2019年12月21日（土）午後4時～6時

**【講義概要】** いうまでもなく日興は日蓮の本弟子六人の一人で、甲府・駿河・伊豆方面の教線のリーダーであった。天台宗四十九院の供僧を勤めながら、同院や近隣の実相寺・滝泉寺等の住僧を日蓮信奉者としていった。日蓮の佐渡流謫では自ら佐渡に赴いて師と濃密な時間を過ごし、赦免後には自らの檀越である波木井実長の領地身延山に日蓮を招いた。これにより佐渡・身延における日蓮の思想変遷を誰よりも身近に感じ取って、立像本尊よりも曼荼羅本尊を、釈尊信仰よりも日蓮信仰を選択することになる。日蓮没後、身延の墓所輪番制が崩れてからは日興とその門下が身延山を守ったが、信仰の中心に日蓮の自筆曼荼羅と御影像がましましたことはまちがいない。身延を離山し、大石寺・重須談所に移住してからもそれは墨守され、曼荼羅と御影像を祀る御影堂を中心に住房が造られていく。講義は現代の客観的な祖書学・文献学にととって進め、日興門流教学の基調となる部分、核となる部分について述べたい。キーワードとしては、上行付属、虚空会から娑婆世界へ、種脱相对、末法の妙法の法体、上行自覚、末法の主師親、熱原法難、名字即成仏、不軽菩薩を挙げておきたい。

**【講師略歴】** 菅原関道（すがわらかんどう）：1959年北海道に生まれ、1971年大石寺で出家。1982年立正大学を卒業し、1983年興風談所の所員となる。研究論文は『興風』28号所収「日蓮の名字即成仏論の探究」、30号所収「同（二）」、『日蓮仏教研究』3号所収「中山法華経寺蔵『識分法門一念三千即離事』の一考察（上）」、4号所収「同（下）」、5号所収「中山法華経寺蔵『秘書要文』の考察」、シリーズ日蓮『日蓮の思想とその展開』所収「日蓮の戒壇論とその展開」など多数ある。

### 第4回 日蓮の専修念仏批判

講師：前川 健一 先生

【日時】2020年1月18日（土）午後4時～6時

**【講義概要】** 日蓮は、法然の専修念仏を批判することで、自らの宗教活動を開始した。日蓮の専修念仏にはどのような特色があるのか。『興福寺奏状』や『摧邪輪』など中世の専修念仏批判や、法然以後の浄土宗の教学的展開を踏まえて、考察を行いたい。また、専修念仏批判が、日蓮自身の思想・実践の中でどのように位置付けられるのか検討してみたい。

**【講師略歴】** 前川健一（まえがわけんいち）：1968年、三重県名張市生まれ。博士（文学、東京大学）。日本仏教思想史専攻。創価大学大学院文学研究科教授。著書『明恵の思想史的研究』（法蔵館）、『明恵上人夢記訳注』（共編、勉誠出版）

## 第5回 撰折論再考

講師：澁澤 光紀 先生

【日時】2020年2月15日(土)午後4時～6時

【講義概要】 撰受・折伏という語は正法護持のための化導法を指していたが、天台教学において教理的な概念としても拡張されて、それを継承した日蓮は末法折伏正意としての諸宗批判を展開した。近代では田中智学が『本化撰折論』で一向折伏の日蓮教学を体系化した。その折伏主義は戦後の創価学会の折伏大行進にもつながっていった。こうした折伏正意の流れに疑義が出されたのが平成の撰折論争であり、その論争では不軽行が撰受か折伏かが焦点となったが、決着がつかずに終息している。今回の講座では、日蓮の撰折観をふまえて近現代において論じられてきた撰折論を検討し直して、将来において私達にならうべき「求法と弘法」とは何かを考えていきたい。

【講師略歴】 澁澤光紀(しぶさわこうき)：1953年東京都生まれ。現在、八王子市善龍寺住職、法華コモンズ仏教学林事務局長、福神研究所所員、JKS47事務局。編者として『立正安国論をいかに読むか』『撰折論争がわかる本』(東京都西部教化センター刊)、論者に「宗教と科学について」「高佐日煌の教学(一)(二)」(法華仏教研究4, 14, 16号)、「日蓮の撰折論とその展開」(シリーズ日蓮第2巻)、「他者と日蓮認識—上原専祿を中心として」(シリーズ日蓮第5巻)、他。

## 第6回 中世の日蓮教団と富士信仰

講師：西岡 芳文 先生

【日時】2020年3月16日(土)午後4時～6時

【講義概要】 三国一の名山と称された富士山は、先史時代から現代にいたるまで、この列島に住む人々によって畏敬される信仰の対象でありつづけている。また中世においては富士山麓は東西日本の政治権力のせめぎ合う歴史的な舞台となり、さまざまな事件の現場ともなった。そのような歴史的背景の中で形成された富士信仰は、神祇・修験のみならずあらゆる仏教宗派において象徴的な意味づけがなされ、重要な役割を付与されてきた。ことに日蓮法華宗では、六老僧の一人・日興が富士山南麓を拠点にして活発な活動を続け、富士門流と呼ばれる大きな教団を築き上げた。しかし自他ともに富士門流という名称で呼ばれるにもかかわらず、この門流における富士山の位置づけは明確ではない。富士山が世界遺産に登録される過程で、富士五山の存在が考慮された形跡はないのも、そうした視点・研究史がなかったことが一因であろう。日蓮宗富士門流を富士信仰の歴史の中でどのように位置づければ良いのか、そのへんを試論的に考えてみたい。

【講師略歴】 西岡芳文(にしおかよしふみ)：1957年東京に生まれ、慶應義塾大学・大学院で日本中世史を専攻し、1987年神奈川県立金沢文庫学芸員となり、学芸課長をへて2018年退職。上智大学特任教授に就任(学芸員課程担当)。金沢文庫において担当した展示(図録)は『龍華寺～武州金沢の秘められた古刹』(2000)、『蒙古襲来と鎌倉仏教』(2001)、『寺社縁起と神仏霊験譚』(2003)、『よみがえる鎌倉の学問～称名寺聖教重文指定記念』(2006)、『陰陽道×密教』(2007)、『称名寺の庭園と伽藍』(2009)、『もうひとつの鎌倉文化』(2011)、『横浜の元祖宝生寺』(2017)など。主要論文は「日本中世の〈情報〉と〈知識〉」(『歴史学研究』716号、1998)、「六壬式占と軒廊御卜」(今谷明編『王権と神祇』思文閣出版、2002)、「阿佐布門徒の輪郭」(『年報三田中世史研究』10号、2003)、「富士山をめぐる中世の信仰」(『興風』22号、2010)、「初期真宗門流の展開」(『佛光寺の歴史と文化』法蔵館、2011)、「円覚寺の創建と密教の祈禱」(『アジア遊学・古代中世日本の内なる「禅」』勉誠出版、2011)など。

—法華コモンズ仏教学林 2019年度 後期特別講座 全6回—

# これからの天皇制

## 《特別講座企画について》

当学林の設立理念に「日蓮思想の再歴史化」があります。それは、現代社会の諸課題に取り組む活きた思想として日蓮仏教を蘇生させていくという実践的な営為です。今回、西山理事長の発案により連続講座「これからの天皇制」を企画しました。本講座では日蓮思想の文脈からは離れて、広く一般的に「天皇制」について論じられてきた6人の先生方を招き、この改元を期にそれぞれの「これからの天皇制」観を語って頂きます。国家と宗教という課題もふくめて「日蓮思想の再歴史化」にもつながる学びの場となります。ぜひご聴講のほどお願いいたします。

会 場：新宿常円寺 祖師堂地階ホール 新宿区西新宿7-12-5 寺務所 ☎ 03(3371)1797  
受講料：1期分 12,000円（半年間6回） ※1回のみ聴講は 3,000円です  
日 時：原則 毎月第4木曜日 午後6時30分～8時30分（2019年10月～2020年3月）  
※各回とも、講義終了後に講師を囲んでの懇親会があります（会費有り）

## 第1回 天皇制の「これから」をめぐって—その呪縛からの自由—

講師：菅 孝行 先生

【日 時】2019年10月24日（木）午後6時30分～8時30分

【講義概要】天皇制は、超歴史的な日本人の集合心性ではない。歴史的な作為の産物である。近代天皇制は維新権力の、敗戦後の天皇制は占領軍と日本の支配層の合作による虚構である。この虚構の特質は、権力の統治形態の中に、天皇が超歴史的な特殊性であるかのような国民の集合的な錯覚を組み入れ、国民を無意識のまま、統治の共犯者に仕立て上げたところにある。天皇制の「これから」は、歴史的に構築された虚構の、政治的な解体の過程となるだろう。

【講師略歴】菅孝行（かんだかゆき）：1939年生まれ。評論家、劇作家。舞台芸術財団演劇人会議評議員、ルネサンス研究所運営委員、河合文化教育研究所研究員。著書に『戦う演劇人』（而立書房、2007年）、『天皇制論集第一巻 天皇制問題と日本精神史』（御茶の水書房、2014年）、『三島由紀夫と天皇』（平凡社新書、2018年）、編著に『佐野碩 人と思想』（藤原書店、2015年）など。

## 第2回 「平成流」とは何だったのか

講師：原 武史 先生

【日 時】2019年11月28日（木）午後6時30分～8時30分

【講義概要】これからの天皇制を考えるためには、平成の天皇制に対するしっかりとした理解が

必要です。「平成流」と呼ばれるスタイルはいつごろ確立されたのか。そのスタイルは、昭和とどこが異なり、どこがつながっていたのか。こうした点を明らかにすることで、平成から令和への見通しを立てることも可能になります。拙著『平成の終焉 退位と天皇・皇后』（岩波新書）をテキストとして、天皇制の過去・現在・未来を考えてみたいと思います。

【講師略歴】原武史（はらたけし）：1962年東京都生まれ。東京大学大学院博士課程中退。現在、放送大学教授。明治学院大学名誉教授。著書に『「民都」大阪対「帝都」東京』（サントリー学芸賞）、『大正天皇』（毎日出版文化賞）、『滝山コミュニケーション1974』（講談社ノンフィクション賞）、『昭和天皇』（司馬遼太郎賞）、『皇后考』など。

### 第3回 出雲神話論 祀らざる神の行方 講師：磯前 順一 先生

【日 時】2019年12月26日（木）午後6時30分～8時30分

【講義概要】天皇個人と制度としての天皇制は区別されなければなりません。いかに個人としての人格がすぐれていようと、それが制度化されたときにはまったく異質の統治組織と化することもあるのです。本講義では、出雲神話における天皇の果たす制度的役割に着目し、「謎めいた他者」として日本国民という主体を構築してきた機能を深く考察していきます。古事記や日本書紀の国譲り神話に遡り、平安時代の延喜式や儀式書、さらには近代国家神道における植民地の役割、最後には水木しげるの漫画に登場する妖怪たちに思いをめぐらせます。

【講師略歴】磯前順一（いそまえじゅんいち）：1961年生まれ。博士(文学、東京大学)。東京大学助手、日本女子大助教授を経て、国際日本文化研究センター教授。ハーバード大学、チュービンゲン大学、ルール大学ボッフム、チューリヒ大学の客員研究員および客員教授を歴任。宗教学、批評理論。主要著書に『近代日本の宗教言説とその系譜』（岩波書店、2003年）、『喪失とノスタルジア』（みすず書房、2007年）、『宗教概念あるいは宗教学の死』（東京大学出版会、2012年）、『闘の思考』（法政大学出版局、2013年）、『死者のざわめき』（河出書房新社、2015年）、『昭和・平成精神史』（講談社、2019年）。共著に『民衆宗教論』（東京大学出版会、2019年）。

### 第4回 国家神道と神聖天皇制崇敬 講師：島蘭 進 先生

【日 時】2020年1月23日（木）午後6時30分～8時30分

【講義概要】歴史学や神道学、さらには宗教社会学の研究者の間で「国家神道」という用語を狭い意味で用いたり、用いないですませようとする動きが目立っている。しかし、これは戦前の体制において、神道祭祀を行う天皇が神聖な存在として崇められ、ついには天皇のためにいのちを捧げることが日本人の本来のあり方だという考え方が大きな役割を果たしたことを隠すことにつながりかねない。「なかったこと」にしかねない論を適切に批判していくための方途を示したい。

【講師略歴】島蘭進（しまそのすすむ）：1948年東京生まれ。1977年東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。筑波大学哲学思想学系研究員、東京外国語大学助手・助教授を経て、東京大学文学部（大学院人文社会系研究科）宗教学宗教史学科教授。専攻は近代日本宗教史、比較宗教運動論。現在、上智大学大学院実践宗教学研究科研究科長・教授、同グリーンケア研究所所長、同コミュニケーションポニカ所長。東京大学名誉教授。著書に『国家神道と日本人』（岩波書店、2010年）、

『日本人の死生観を読む』（朝日新聞出版、2012年）、『つくられた放射線「安全」論 科学が道を踏みはずすとき』（河出書房新社、2013年）、『宗教を物語でほどく』（NHK出版 2016）、『宗教ってなんだろう』（平凡社、2017年）、『ともに悲嘆を生きる』（朝日新聞出版、2019年）、『神聖天皇のゆくえ』（筑摩書房、2019年）、『明治大帝の誕生』（春秋社、2019年）

## 第5回 天皇制の将来

講師：大澤 真幸 先生

【日 時】2020年2月20日（木）午後6時30分～8時30分

【講義概要】天皇制は、日本史の最大の謎である。なぜ、天皇制は存続してきたのか。日本史をふりかえてみると、天皇制は、ほとんど何の役目も果たしていないように見えるときでさえも、廃されることはなかった。武家政権は、何度も交替してきたにもかかわらず、である。どうして、天皇制はあるのだろうか。この問いは、これを維持している当の日本人にとっても答えられない謎である。この講義では、まず、天皇制が現代の日本において実際にはどのような機能を果たしているのか、社会学的に説明する。その上で、将来の天皇制のあり方に関して、かなり大胆な（意外な）提案をすることになるだろう。

【講師略歴】大澤真幸（おおさわまさち）：1958年。長野県松本市生。東京大学大学院社会学研究科修了。社会学博士。千葉大学文学部助教授、京都大学大学院人間・環境学研究科教授等を歴任。現在、個人思想誌『Thinking「O」』を主宰。著書に、『ナショナリズムの由来』（毎日出版文化賞）、『〈世界史〉の哲学』、『自由という牢獄』（河合隼雄学芸賞）、『日本史のなぞ』、『三島由紀夫 ふたつの謎』、『社会学史』等。

## 第6回 「象徴天皇」と「人間天皇」の矛盾について 講師：片山杜秀 先生

【日 時】2020年3月26日（木）午後6時30分～8時30分

【講義概要】近代天皇制は明治維新の経過を通じて創出されたと考えることができ、それは「新しい神話」として機能しました。その基調は「シロシメス」でしょう。「自らの意思を示さず、頷いて統治する」と言い直しても良いかもしれません。そんな「シロシメス」は、大日本帝国憲法期にも、右からの「天皇親政」、左からの「反天皇」によって挟撃されました。そして戦後民主主義の時代、「シロシメス」は「象徴」に受け継がれますが、「天皇親政」は「玉音放送」を通じて「人間天皇」につながるとみなすこともできるでしょう。そして両者の矛盾が爆発したのが平成末期だったのでないでしょうか。すると今後はどうなるのか。そんな道筋でお話しできればと考えます。

【講師略歴】片山杜秀（かたやまもりひで）：1963年宮城県生まれ。慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程単位取得退学。慶應義塾大学法学部教授。著書に『近代日本の右翼思想』、『未完のファシズム』、『平成精神史』、『鬼子の歌』、『音楽放浪記』、『近代天皇論』（島蘭進との対談）など。サントリー学芸賞、吉田秀和賞、司馬遼太郎賞受賞。

## 歴史から考える日本仏教④ 鎌倉仏教史の名著を読む

講師 菊地 大樹 先生

### 【講師よりのコメント】

この講座は、歴史学の立場から日本仏教のさまざまな側面を継続的に考えてゆくことを目指します。これは言い換えれば、教理文献に残された思想を、それが著された時代の文脈の中で立体的にとらえなおす営みに他なりません。しかもひとつの時代は系譜となって、前後に長く連なってもいます。そこで日蓮の生きた鎌倉時代をつねにどこかで射程に入れつつも、ときには原始古代にまでさかのぼり、また私たちの生きる近現代にも立ち戻って進んでいきたいと思えます。

2019年度後期は、前期に引き続き参加者と一緒に名著を読み進めてみたいと思えます。前期は日本宗教史全般に関する入門的な内容でしたので、後期はもう少し絞って、鎌倉仏教に焦点を当ててみましょう。すでに、研究論文や引用史料へのアプローチの方法などについてはお話ししましたので、後期はそれを踏まえてさらに論文の内容に踏み込んでいきたいと思えます。ただし、もちろん前期を受講していなくても差し支えありませんし、6回のうちどれか1回だけを選んで出席しても、十分に理解できるようにしていきたいと思っています。前期と同様、古典と言っていいような名論文から、近年の研究を切り開いた野心的な研究論文にまで目を向けてみましょう。

日蓮は、言うまでもなく鎌倉仏教の花形の一人です。しかし、日蓮を理解するためには鎌倉時代の天台宗や他の宗派、また宗派には収まりきれない中世のひとびとの信心にまで目を広げて勉強していく必要があります。わずか6回ですべてを網羅することはできませんが、みなさんが日蓮や鎌倉仏教に対して今までとは違った視点からの興味を感じていただければ幸いです。

前期にもお話ししたように、歴史には堅苦しい定理や公式はありません。優れた歴史の論文は、自由な叙述によって読者を魅了していきます。優れた研究文献を講読しながら、生き生きとした鎌倉仏教の世界をいっしょに学んでいきましょう。

みなさんには、毎回指定された学術論文1点をあらかじめ通読してから参加していただきます(テキストとなる論文は、事務局でご用意いたします)。その上で、その論文に述べられているさまざまな時代背景や、関連する他の著書・論文についてもご紹介していきます。6回の講義を通じて、こんどは鎌倉仏教研究に関しても展望が開けることを目指しましょう。

### 【全6回講義】※毎月第3火曜日 午後6時30分～8時30分

- 10月15日：第1講 上島 享「鎌倉時代の仏教」を読む
- 11月19日：第2講 家永三郎「日蓮の宗教の成立に関する思想史的考察」を読む
- 12月17日：第3講 平 雅行「法然の思想構造とその歴史的 position」を読む
- 1月21日：第4講 阿部泰郎「女人禁制と推参」を読む
- 2月18日：第5講 佐藤弘夫「怒る神と救う神」を読む
- 3月17日：第6講 大塚紀弘「中世「禅律」仏教と「禅教律」十宗観」を読む

【講師略歴】 菊地大樹(きくちひろき)：1968年東京都生まれ。東京大学大学院修士課程修了。博士(文学)。現在、東京大学史料編纂所准教授。

【参考文献出典情報】

- 上島亨「鎌倉時代の仏教を読む」、大津透他編『岩波講座日本歴史』中世1、岩波書店、2013年／
- 家永三郎「日蓮の宗教の成立に関する思想的考察」『家永三郎集』2(仏教思想史論)、岩波書店、1997年(初出1944年)／
- 平 雅行「法然の思想構造とその歴史的位罫」『日本中世の社会と仏教』塙書房、1992年(初出1979年)／
- 阿部泰郎「女人禁制と推参」『湯屋の皇后』名古屋大学出版会、1998年(初出1983～93年)／
- 佐藤弘夫「怒る神と救う神」『神・仏・王権の中世』法蔵館、1998年(初出1995年)／
- 大塚紀弘「中世「禅律」仏教と「禅教律」十宗観」『中世禅律仏教論』山川出版社、2009年(初出2003年)

会 場：新宿常円寺「祖師堂3階会議室」新宿区西新宿7-12-5 寺務所 ☎03(3371)1797  
受講料：1期分12,000円(半年間6回) ※1回のみ聴講は3,000円です

—法華コモンズ仏教学林 平成30年度 連続講座—

# 「『法華経』『法華文句』講義」

講師 菅野 博史 先生

【講師よりのコメント】

今年度の後期も、『法華経』『法華文句』の講義を継続します。『法華文句』は『法華経』の随文釈義の注釈書ですので、「注釈書読みの経典知らず」にならないためには、『法華文句』を読むときには、常に『法華経』の本文を読まなければなりません。現在、『法華文句』の本文を地道に読む機会はほとんどないと思われまので、この講義では、『法華文句』の本文をすべて読んでいます。もちろん同時に『法華経』も読んでいきます。受講生のご希望がある限り、地道に続けていきたいと思っています。なお、福神研究所主催の『摩訶止観』の講義はすでに五年が終わり、巻第五下(十乗観法の部分)を講義をしているところです。この講義と同日、同所で開催しています(時間は15時～17時半)。

★教科書 『法華文句』I～IV(第三文明社、各冊2,484円)→割引価格各冊2,000円

★『法華経』はプリントを配布します。

## 【講師略歴】

菅野博史 (かんのひろし)：1952 年福島県生まれ。1976 年東京大学文学部印度哲学印度文学科卒業。1984 年東京大学大学院博士課程（印度哲学）単位取得退学。1994 年文学博士（東京大学）。現在創価大学文学部教授。専門は、仏教学、中国仏教思想史。著書に『一念三千とは何か一摩訶止観正修止観章一』（第三文明社）、『法華経入門』（岩波書店）、『中国法華思想の研究』（春秋社）、『南北朝・隋代の中国仏教思想研究』『法華経一永遠の菩薩道一』（大蔵出版）、他。訳書に『法華文句・I II III IV』『法華玄義・上中下』（第三文明社）。

## 【講義日】

※原則 第4月曜日（4月、6月、8月、12月は別）午後6時30分～8時30分

第5回 8月26日	第9回 12月23日
第6回 9月30日	第10回 1月27日（2020年）
第7回 10月21日	第11回 2月17日 //
第8回 11月25日	第12回 3月30日 //

会 場：新宿常円寺「祖師堂地階ホール」新宿区西新宿 7-12-5 寺務所 ☎03(3371)1797

受講料：1期分 12,000 円（第7回～第12回の6回） ※1日のみ聴講は 3,000 円です

## 講座会場

福聚山常円寺 祖師堂（3階または地階）  
〒160-0023 東京都新宿区西新宿 7-12-5  
寺務所 ☎03(3371)1797

### 《会場への交通》

- JR線・小田急線・京王線・丸ノ内線を利用の場合  
⇒ 新宿駅西口改札より徒歩6分
- 西武新宿線を利用の場合  
⇒ 西武新宿駅正面口改札より徒歩6分
- 大江戸線を利用の場合  
⇒ 新宿西口駅「D5出口」より徒歩3分
- 丸ノ内線を利用の場合  
⇒ 西新宿駅1番出口より徒歩4分



# 受講の申込について

聴講希望の方は、この頁のコピーまたは別紙（チラシ）申込欄の各項目に御記入頂きまして、下記のファックス番号にご送信ください。申込用紙が届きましたら、「受講手続き書類」をお送りいたしますので、その手続きに従って1期6回分の「受講料」をお振込下さい。お振込を確認しましたら、「受講証」・「受講の手引き」そして領収書をお送りします。

なお、メールで申込希望の方は、同様の内容をお書きの上、下記のアドレスに送信してお申し込み下さい。なお、受講者が極端に少ない場合は開講を見合わせますので、ご了承下さい。

メールアドレス ⇒ [hokkecommons@gmail.com](mailto:hokkecommons@gmail.com)

FAX 番号⇒ 042-627-7227 / ブログ⇒ <https://hokke-commons.jp>

..... 申込欄 .....

《受講希望の講座の□をチェックして下さい（いくつでも結構です）》

連続講座「法華仏教講座」（全6回の受講）

※個別の受講の場合  1回  2回  3回  4回  5回  6回

連続講座「これからの天皇制」（全6回の受講）

※個別の受講の場合  1回  2回  3回  4回  5回  6回

「歴史から考える日本仏教④ 鎌倉仏教史の名著を読む」 講師：菊地 大樹

『法華経』『法華文句』講義 講師：菅野 博史

上記、チェックを入れた講座の受講申込みをいたします

○氏名 \_\_\_\_\_ 男・女 \_\_\_\_\_ 才

○住所 〒 \_\_\_\_\_

○電話 \_\_\_\_\_ Fax (mail) \_\_\_\_\_

平成 30（2018）年8月1日 発行：法華コモンズ仏教学林 事務局  
192-0051 八王子市元本郷町 1-1-9 善龍寺内 FAX 042-627-7227